ヤマナカオンセンエンギ　山中温泉縁起　一册。江沼郡山中にある醫王寺の縁起は、もと建久年間に書いたと稱するものがあつたが、寛政十年の災に失せてゐたのを、文化八年十四世の住僧良應が、それを越前藥王院で發見し、那谷寺の善寧及び菅生石部神社の大江知言と謀つて國字に改めたといふのであるが、建久云々は虛僞であらう。この緣起は、江戸の高木直員が插畫を、平安住備前の登々庵武元質が書を分擔して畫卷物としたのである。本書はその文を寫し、外に良應の山中溫泉湯治養生卷と、小川景福の北陸加陽江沼郡山中十景とを添へたものである。

ヤマナカオンセントウジヨウジヨウノマキ　山中溫泉湯治養生卷　江沼郡山中醫王寺十四代の僧良應が文化十年に書いたもので、同溫泉の効驗と澡浴の方法十二條を認めてある。

ヤマナカガハ　山中川　江沼郡大聖寺川の上流は山中附近にて山中川といふ。句空の草庵集に『山中の川ちかき所に閑居をしめて、川音やうき世隣のほとゝぎす　自笑』

ヤマナカサンシヨウ　山中三笑　一册。美濃の俳人支考編。京柏屋勘右衞門板で、支考が山中溫泉滯在中、昨蓑・伯兎・琴之・桃妖と興行した歌仙三卷、北枝から送つた湯見舞の文一通、及び支考・播東・伯兎・古賀・琴之・昨蓑・重葉の七吟百韻一卷を收めてあり、その事のあつたのは菊十歌仙の序によれば寶永六年であらう。しかし蓮二坊の名があるから、支考の亡命した正德元年以後のやうでもあるといふ。

ヤマナカジツケイ　山中十景　江沼郡山中溫泉附近の景勝を選んだもので、醫王林花・溫泉烟雨・水無啼猿・富士寫雪・黑谷城跡・桂淸水螢・蟋蟀橋霜・高瀨漁火・大岩紅葉・道明淵月をいふ。

ヤマナカシユウ　山中集　一册。伊勢の俳人涼兎編。元祿十七年京井筒屋庄兵衞板。著者が去年山中溫泉に遊んで、北枝・萬子・桃妖・里臼及び乙由等と唱和した附合及び發句を收め、その發句中には千疋猿と題して、其角以下諸家の猿の句を集めて居る。序文は支考。

ヤマナカシユウ　やまなかしう　一册。可大著。芭蕉が奥の細道の歸路、加賀の山中で曾良に別れる時、北枝の『馬かりて燕追行別れかな』を發句にした山中三吟といふのがある。それの北枝が自書したものには、芭蕉が一句毎に加筆した趣を記してあつたが、著者の所藏となつてゐたので、それを卷頭に置き、又著者のものした三卷の歌仙を附錄したものである。自序は天保十年八月で、著者は梅室門であつた。京野田治兵衞板。

ヤマナカジユウニケイ　山中十二景　江沼郡山中溫泉附近の名勝を擇んで十二景を數へる。その江沼志稿に載せられたものは、醫王山櫻、溫泉煙雨・水無啼猿・富寫晴雪・高瀨漁火・蛍橋歸樵・道明秋月・黑谷晚霞・大巖紅葉・二店翠嵐・黑瀨白鷺・桂下淸泉であるが、別に溫泉・長谷部神社・醫王寺・采石巖・蟋蟀橋・道明淵・桂泉・昧谷・高瀨・大巖・關山・小富士を選ぶものもある。

ヤマナカジヨウ　山中城　江沼郡山中に在つた。越登賀三州志故墟考にいふ。山中・黑谷二名一蹟である。山中村入口黑谷橋を過ぎ向かうの山の半腹より下、平地に至るまでが堡址であり、この上を黑谷城といふ。卽ち黑谷越右方の城山である。建武二年長盛連山中城に在り。天正八年九月朝倉氏の士吉田某、賊魁岸田常德寺と共にこゝに據つたを、柴田勝家攻めて陷れ、永祿十年加越和睦の際には、越前方の黑谷・檜屋・大聖寺三城を毀つたとあると。

ヤマナカダニ　山中谷　江沼郡では鄕庄名を失うたから、かゝる惣名が用ひられてゐた。山中谷には菅生・南鄕・百々・曾宇・直下・日ノ谷・荒木・川南・中田・長谷田・上原（土谷を含む）・塚谷・別所・山代・保賀・黑瀨の十六ヶ村があつた。

ヤマナカヌリ　山中塗　江沼郡山中溫泉のある山中部落で製作する漆器。この地では古くから轆轤細工の簡單な玩具などが賣出されてゐたが、元祿頃より稍進歩し、燭臺・茶托などが作られ、寶曆年間から栗色塗が創められた。次いで寛政の頃山野九郎兵衞が販路を京坂に開くに及び俄然勃興し、文化中には越前丸岡の御用塗師幾藏が來て、朱塗・靑塗・石黃塗等の法を敎へ、天保には會津の塗師重右衞門も來り、邑民越前屋六右衞門は研出塗・貝蠟塗・星鹿子等を案出し、嘉永中山屋久三郎は漆工三國屋彌右衞門と謀つて棒法を改良し、且つ薄手木皿・筍辨當を初めて山中漆器の名聲を高め、弘化以降蓑屋平兵衞は糸目挽に手腕を振うて筋物挽の元祖と稱せられた。次いで萬延元年山野屋理八は長崎に販賣を試み、文久中には山中に漆器會所を設置し、次いで慶應三年大聖寺藩の物産役所を起すや、その奬勵を得て大に盛況を呈した。是より先文政八年京都の善介が來て、邑民笠屋嘉平に描金の法を傳へ、天保九年會津の蒔繪師由藏も亦業をこの地に開き、次いで金澤の一德齋は高蒔繪の法を傳へた。併し山中漆器の特徵は、木地挽の巧妙と價格の低廉とにあつて、描金の如きは素より第二義のものであつた。

ヤマナカハツケイ　山中八景　江沼郡山中溫泉附近の八勝を擇んだもので、醫王寺・小富士・促織橋・昧谷・道明淵・高瀨・桂泉・采石巖をいふ。

ヤマナカブシ　山中節　江沼郡山中溫泉で、もと湯女がうたうた俗謠である。『忘れしやんすな山中道を東や松山西や藥師』をもと歌とし、『山が高うて山中見えぬ　山中戀しや山憎や』などゝもうたふ。

ヤマナカモンドウ　山中問答　金澤の俳人北枝の著。元祿二年芭蕉が山中溫泉で語つたことを書いたといふ。刊本の一は閑日庵鶯里の三四考所載のもので、天保九年阿波德島天瀧屋德兵衞の開板。今一つは乙也序、也同跋、京近江屋又七の開板で、嘉永年中のものである。

ヤマナカヤワ　山中夜話　稿本二册。金澤の俳人麥水の著で、貞享蕉風口傳書と角書がある。著者の貞享句解傳書及び蕉門一夜口授と同趣旨のもので、貞享の蕉風を鼓吹した俳論である。その乾の卷の末には明和壬辰の冬神無月とあり、坤の卷は追加及び追々加で、末に安永二癸巳林鐘日この書を之丸に讓つたことが記されてゐる。追加中の、麥水が長崎に遊んで和蘭人に發句を示した條は珍しい。

ヤマナカユウキ　山中遊記　一册。橘碧桃著。甲子初冬十七日友人寺田某と共に、山代溫泉を經て山中溫泉に至つたことを漢文で記したものである。